

# 青木繁と蒲原有明

——詩「機縁」をめぐって——

藤 中 孝 子

青木繁と有明との出会いは明治三十六年の白馬会にはじまる。当時、青木繁はまだ美術学校の学生であつたが『黄泉比良坂』『閻威弥尼』『優婆尼沙土』など神話画稿数点は、人々の眼を驚かし、新しく制定された第一回の白馬賞を与えられた。有明がいかにこれらの作品から深い感動を受けたかは、『飛雲抄』に収録されている「蠱惑的畫家―その傳説と印象」をみれば明らかである。

翌三十七年、青木繁は大作『海の幸』を白馬会に出品した。これが再び有明はもとより多くの觀衆にすさまじい芸術的感動をよびおこしたことはいうまでもない。その時の有明の感動は作品『海の幸』となつてあらわれたのである。これと前後して有明は青木繁を訪問する機会を得た。有明は九州時代、古事記や万葉集を愛読しているし、青木繁もまた画材を神話にとつてくるほど古

典に通じた画家である。二人の間に神話の話がはずんだのも当然のことであろう。こうして二人の間には美しい友情が培かれていくのである。

## 一

松村緑先生の『蒲原有明論考』（昭和四十年三月）にはじめて紹介された逸詩「機縁」には、友なる畫家の畫稿に題すと注がついている。そしてこの「友なる畫家」というのは、青木繁のことである。詩「機縁」は青木繁の画によせられたものだとして解説されている。それで画稿について、またこの詩が寄せられた画についていろいろ調べてみると、青木繁の書簡集（『仮象の創造』青木繁）の中に、有明にあてた次のような手紙があつた。

明治三十八年三月十七日付

謹啓、昨日は遅くまで御邪魔、御好情拜謝仕候。扱其節御話申上候木版の伊上凡骨氏へ明日午前小生方へ参る様貴君より御申聞被下度、別にも小生少し尋ね度事有之候間御頼み申上候。本日泣菫氏へ書面差出可申候。…(中略)……

1 發作(男性) 蒲原氏

2 同 (女性) 同

3 神秘 與謝野氏

4 運命 同

5 流轉 晶子

6 同 同

7 倚伏 泣菫氏

8 同 同

とやうに相成申候。與謝野氏御住所御知らせ被下度候。……

(下略)……

これは当時計畫中であつた画稿集に収めるべき図題と、その図題にちなむ詩を依囑する詩人についての繁の心組みである。この他に岩野泡鳴も加わっている。

また、同じく四月二十日付の手紙に

拜啓、御送被下候玉稿難有鳴謝仕候。御蔭を以て、多少の故障は有之候へども、漸く進捗仕候儀に候、追て第二輯(畫稿

集)を撰み申候場合は重ねて御盡力の程偏に願望申上候。

……(下略)……

これによつて有明の詩ができて、青木繁に渡されたことがわかる。繁は画稿集のためにいろいろ力を尽くし、素描もしていたらしいのだが、この画稿集はその後、発刊中止となつてしまつた。この「發作(男性と女性)」に寄せられた有明の詩が「機縁」ではないかと思われる。

これより先、青木繁は明治三十七年十二月五日に発刊された岩野泡鳴の詩集『夕潮』に表紙と四つの挿画をかいている。その四つの挿画の題がそれぞれ、發作・渾沌・神秘・本然となつている。一頁を飾っている「發作」と題された画は有明が「蠱惑的畫家」の中でのべているように、奔騰する海の波から二岐に分れて、白い女の形と絶叫するでもあらう男の體が湧出してゐる。その周圍には所謂四大の烈しい争闘がある。就中背後に火の山が盛んに活動してゐる。画である。6.3×10.5cmの小さな画なのだが女の表情、体の動きなど確かにみる人のところをとらえる。この画について有明は、生命の發現で、同時にまた性の發芽であらう、と言つてゐるが、この説明はそのまま「機縁」にもあてはまるのである。『夕潮』の挿画の「發作」がそのまま画稿集に計畫された「發作」だとはむろん言いきれないが、すくなくとも、生命の誕生をうた

つた画であり、挿画の「發作」に近いもの、あるいはそれが展開されたものであることは、間違いないであろう。

## 二

### 機縁

蒲原有明

(友なる畫家の畫稿に題す)

#### その一

大海かたち定めぬ却初の代に  
水泡の嵐たゆたふ千尋の底。  
折しも焰はゆるき『時』の鎖、  
まひらく永き刻みに囚れつつ、  
群鳥翔る翼のその噪ぎと、  
その疾さあらめ、宛も眠り轉び、  
無際の上枝下枝を火の殻負ひ  
這ひもてわたる蝸牛の姿しめす。

火と水、相遇はざりし心を、今、  
夜とせば、かりそめならぬ朝や日や、  
舞ひたつ疾風歡喜空を揺りて、  
擁きぬ、觸れぬ、燃えなす願ひよ、將た、

霑すおもひよ、ここに力の芽は  
男子と燻りて、雙手、見よ、披けり。

#### その二

水と火、憶相遇へり、青き膏、  
浮浪ただよふひまをかぎろひたち、  
くちづけ、手握るや、このひと時こそ  
生命の精なれ、よろづの調のもと。  
歌へり『却初』、かかれば極のくまも  
讃頌こだまにこたへ、化り出でたる  
眞白き姿——しぶきと消えぬ花や、  
奇しきにはひ焰の葉をまとふ。

現ぜる女よ、胸乳抑ふる手の  
とこしへ解きもあへざる深きおもひ  
つゝみて獨りながむるけはひ著るし  
なべての秘事孕むこは母ごと  
知れりや、水泡胡蝶のつばさ浮び、  
千條の烟いぶきて薫りみちぬ。

(「月刊スケッチ」第二卷第十一号・明治三十九年二月一日発行)

この詩は、宇宙の誕生、生命の誕生、そして人類の誕生を高ら

かにうたつたものである。「その一」の一連では、形を成そうとする力強い原始の力がうたわれている。天地の定まらないはじめ、「時」は万年、億年で計算するような大きな動きをしている。そのゆるやかな雄大な流れの中で、焰と水とが、無限の空間の中で揺れ動き、非常に大きな運動を展開している。

二連において、ついに火と水のところがあわさつて、真の夜明けが訪れる。疾風が空を駆けり、さまざまな思い、願い、燃えるようなところ、そして力を持つて男が誕生するのである。

「その二」の一連では、生命の誕生をたたえる歓喜にみちた情景がうたわれている。火と水があわさり、海ができ浮浪が漂う、このひと時こそ生命のもとなのであると。

そして、二連において、深きおもいを胸に秘め、すべての秘事を孕んだ母——女が誕生する。

有明は、青木繁の画の中に地・水・火・風の四大の争闘と変形と壊滅をみていた。この詩も、世界のはじまりとして焰と水との戦をうたい、この二つの相遇う時を真の夜明けの訪れとしてとらえているのである。

「その一」の雄々しい男性の誕生、生き生きとしたダイナミックな動きに対して、「その二」の方は、世界ができあがった直後

の穏やかな歓びがあつて、深きおもい、すべての秘事をはらんだ母なる女性の恥じらいを含んだ誕生である。男性の誕生は、地面にしつかりと足をつけて両手をさしあげている力強い姿を思わせるのだが、女性の方はひめやかに海の中から現われてくる感があつて、どこことなくボッティチェルリの『ヴィーナスの誕生』を思ひおこす。

この詩の題である「機縁」という語は仏教用語で時機因縁、すなわち動機・機会という意味である。ここでは、男性と女性の相遇時、生命の源となる時、つまり男性と女性のかかわり、これを機縁としてとらえたものであろう。有明の仏教的素養のうかがわれる詩題である。

なお詩型は独絃調（四七六調）ソネットである。

（本学日本文学科三年）